

# 川路大明神原遺跡

—携帯電話中継基地局鉄塔建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

# 川路大明神原遺跡

—携帯電話中継基地局鉄塔建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市川路地区は、飯田市の南端に位置し、天竜川の右岸一帯に河岸段丘や沖積地が広がる地形的な特徴があります。

このような地形を利用して、私たちの祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えていくことが私たちの責務であります。

川路地区は、三遠南信道や県道バイパス工事が進みつつあり、住宅の移転等で宅地化が進みつつある地域です。今次調査箇所も、三遠南信道路のインターに接する個所に当たります。この一帯には、三遠南信道路に先立つ調査で、縄文時代中期を中心とする集落や、集落の縁辺部から落とし穴などが見つかり、縄文時代の集落景観が半明しつつある重要な地域です。このため、関係各機関と協議の結果、工事実施に先立って発掘調査を行って、記録保存を図ることとなりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりですが、今回の調査では、集落の外縁部の様相が明らかとなり、弥生時代と推定される住居址も見つかって、当地区的歴史的な重層性が明らかになりつつあります。調査で得られました様々な知見は、これから地域の歴史を知っていく上で貴重な資料になると確信しています。

最後になりましたが、調査の実施に当たり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ様をはじめ、調査に関係されたすべての皆様方に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

長野県飯田市教育委員会

教育長 伊澤 宏爾

# 例　言

1. 本書は、携帯電話中継基地局鉄塔の建設に先立って実施された、飯田市川路 川路大明神原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ ネットワーク本部から委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成18年度に現地作業を行い、平成19年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量を株式会社日本空間情報システムに委託した。
5. 発掘作業及び整理作業にあたり、遺跡略号をKDMとして使用し、調査箇所の中心地番である5244を略号に附して使用した。
6. 図面及び遺物の注記に当たっては以下の遺構略号を使用した。  
堅穴住居…SB 土坑…SK 溝…SD
7. 土層の色調及び土性の記載に当たっては『新版標準土色帳』2005年度版の表示に基いて記した。
8. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により下平博行が行った。
9. 本文の執筆・編集及び遺構写真撮影は下平が、遺物は西大寺フォト 杉本和樹氏が撮影した。
10. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

# 目　次

|                       |                 |    |
|-----------------------|-----------------|----|
| 序                     | 第IV章 総 括 .....  | 13 |
| 例　言                   | 第1節 遺跡の景観 ..... | 13 |
| 目　次                   | 第2節 結語 .....    | 13 |
| 第Ⅰ章 経　過 .....         | 写真図版 .....      | 15 |
| 第1節 調査に至るまでの経過 .....  | 報告書抄録 .....     | 21 |
| 第2節 調査の経過　調査日誌 .....  |                 |    |
| 第3節 調査組織 .....        |                 |    |
| 第4節 調査位置・調査区の設定 ..... |                 |    |
| 第5節 調査の概要 .....       |                 |    |
| 第Ⅱ章 遺跡の環境 .....       |                 |    |
| 第1節 自然環境 .....        |                 |    |
| 第2節 遺跡の基本層序 .....     |                 |    |
| 第3節 歴史環境 .....        |                 |    |
| 第Ⅲ章 調査結果 .....        |                 |    |
| 第1節 遺構 .....          |                 |    |
| 第2節 遺物 .....          |                 |    |

# 第一章 経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

平成18年4月18日付で、東京都千代田区永田町二丁目11番1号 株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ ネットワーク本部 執行役員 無線アクセスマルチネットワーク部長 新見英樹より文化財保護法第93条第1項に基づく土木工事のための埋蔵文化財発掘の届出が提出された。内容は川路大明神原遺跡内における携帯電話中継基地局鉄塔の建設である。計画地は三遠南信道路工事に先立つ発掘調査において、遺構・遺物が確認された個所に接し、同様な遺構の存在が予想された。このため諸協議の結果、工事に先立ち発掘調査を実施することとした。

## 第2節 調査の経過

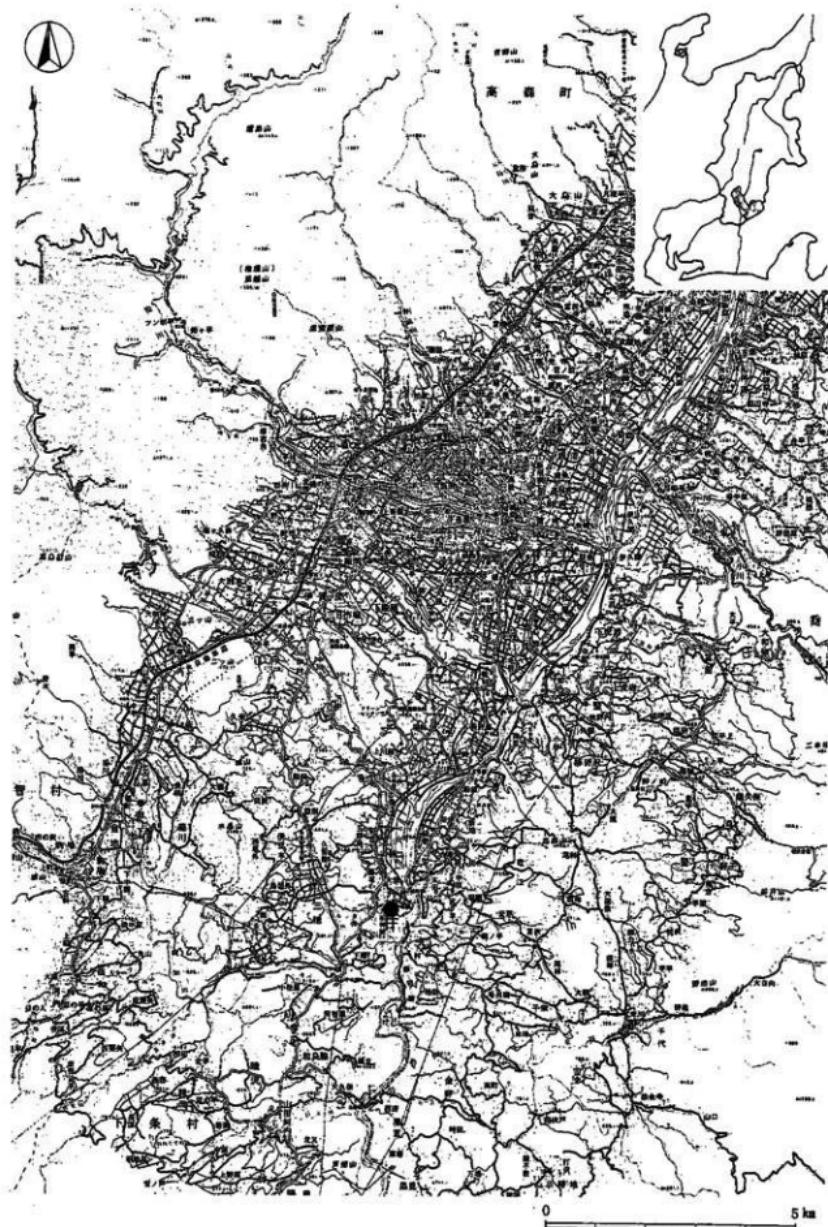
諸協議に基づいて、平成18年5月12日、東京都千代田区永田町二丁目11番1号 株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ ネットワーク本部 執行役員 無線アクセスマルチネットワーク部長 新見英樹と飯田市長 牧野光朗の間で埋蔵文化財発掘調査に関する協定及び平成18年度の発掘作業分について委受託契約を締結した。その後諸協議を経て、平成18年5月15日に現地での発掘調査に着手した。飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づくグリッド設定を㈱日本空間情報システムに委託実施し、遺構検出面が浅いと予想されるため、手掘りによる表土剥ぎを行った。現地が果樹園のため遺構検出面のおよそ1/3が耕作による攪乱を受けていたが、精査の結果、住居址・土坑等の遺構を確認したため、各遺構の掘り下げを開始した。その後、調査した遺構について写真撮影・測量調査を実施し、6月1日には補足調査及び現地の埋め戻し作業を行い、発掘機材を撤収してすべての現地作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において、現地での記録類の整理作業を行った。

平成19年度は、4月9日付けで整理作業及び報告書作成に関する委受託契約を締結し、出土遺物の整理作業・報告書作成作業を行うこととなった。飯田市考古資料館で出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測を行い、遺物写真撮影・遺構図版の作成・トレース作業・版組等を実施し、本報告書作成作業にあたった。

### 調査日誌

|            |                    |
|------------|--------------------|
| 平成18年5月15日 | テント等設営。人力での表土剥ぎ開始。 |
| 5月16日～22日  | 検出面までの掘り下げ。        |
| 5月23日      | 遺構検出作業。土坑多数検出      |
| 5月24日～28日  | 土坑掘り下げ作業           |
| 5月29日      | 住居址確認・掘り下げ・図面作成    |
| 5月30日      | 住居址掘り下げ・図面作成       |
| 5月30日      | 遺構清掃・個別写真撮影        |
| 5月31日～6月1日 | 人力での埋め戻し作業         |



挿図1 遺跡の位置

### 第3節 調査組織

#### (1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 伊澤宏爾

調査担当者 下平博行

作業員 伊藤和江 伊東裕子 金井照子 中島育子 林伸好 牧之内昭吉 松井明治 松本恭子

#### (2) 指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

#### (3) 事務局

飯田市教育委員会生涯学習課（～平成18年度）・生涯学習・スポーツ課（平成19年度～）

小林正春（生涯学習課長～平成18年度）・宇井延行（平成19年度～）

馬場保之（文化財保護係長～平成18年度）・山下誠一（平成19年度～）

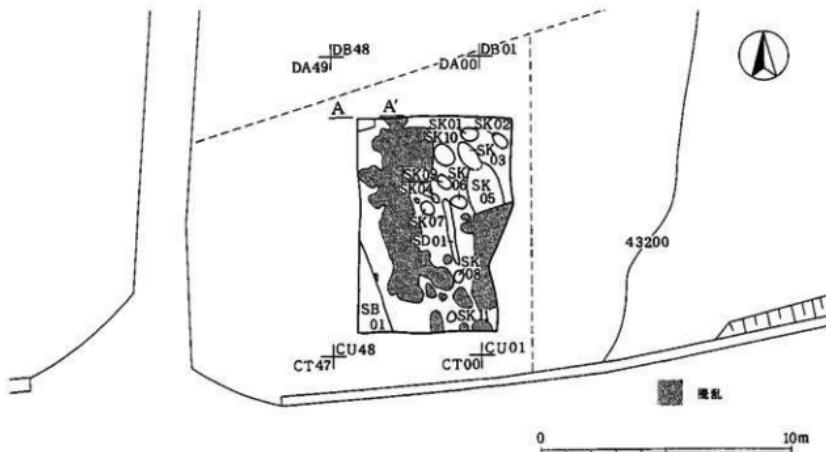
宮澤貴子・濱谷恵美子・下平博行・坂井勇雄・羽生俊郎（以上 文化財保護係）

### 第4節 調査位置・調査区の設定

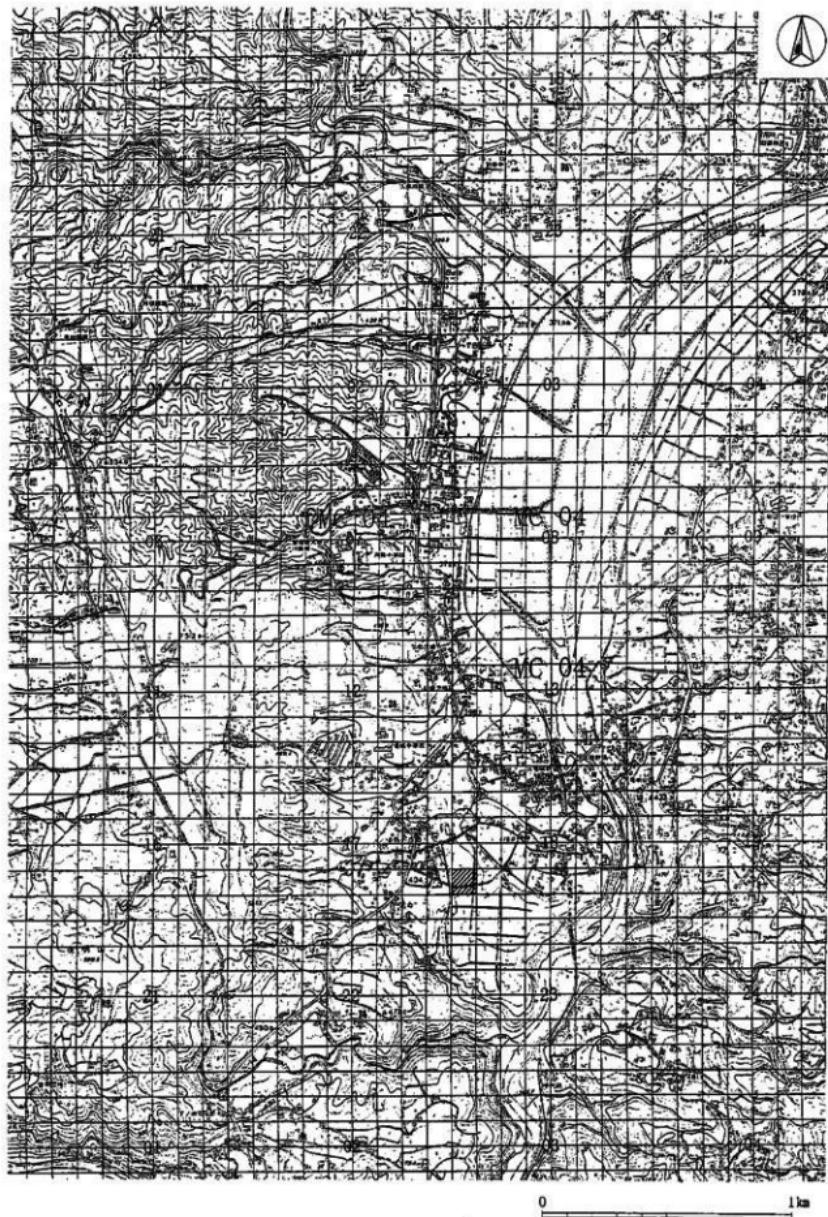
今次調査は、飯田市川路5244番地（挿図1）であり、調査前は果樹園として利用されていた。遺跡における発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による区画、MC04 18-33・34（挿図3）に位置し、これに基づいたグリッド設定を㈱日本空間情報システムに委託実施した。

### 第5節 調査の概要

およそ44m<sup>2</sup>を調査対象とした。確認された遺構（挿図2）は縄文時代中期の土坑11基・溝址1条・弥生時代後期と推定される住居址1軒で、遺物は縄文時代中期の土器・石器が主体となった。



挿図2 調査区全体図



挿図3 基準メッシュ図

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

飯田市は伊那山脈と木曽山脈に挟まれた伊那盆地（通称 伊那谷）の南端に位置し、盆地の中央には天竜川が南流する（挿図1）。

伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動によって成立した盆地や段丘とによって構成された段丘地形であり、さらに山塊からの扇状地や天竜川の支流群の浸食によって形成された田切地形と呼称される河岸段丘とが組み合わさり、より複雑な地形を生み出している。この段丘は、主に御嶽山の火山灰土の堆積を基準にし、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘I・低位段丘IIの5段階に編年されている（下伊那地質誌編集委員会 1978）。

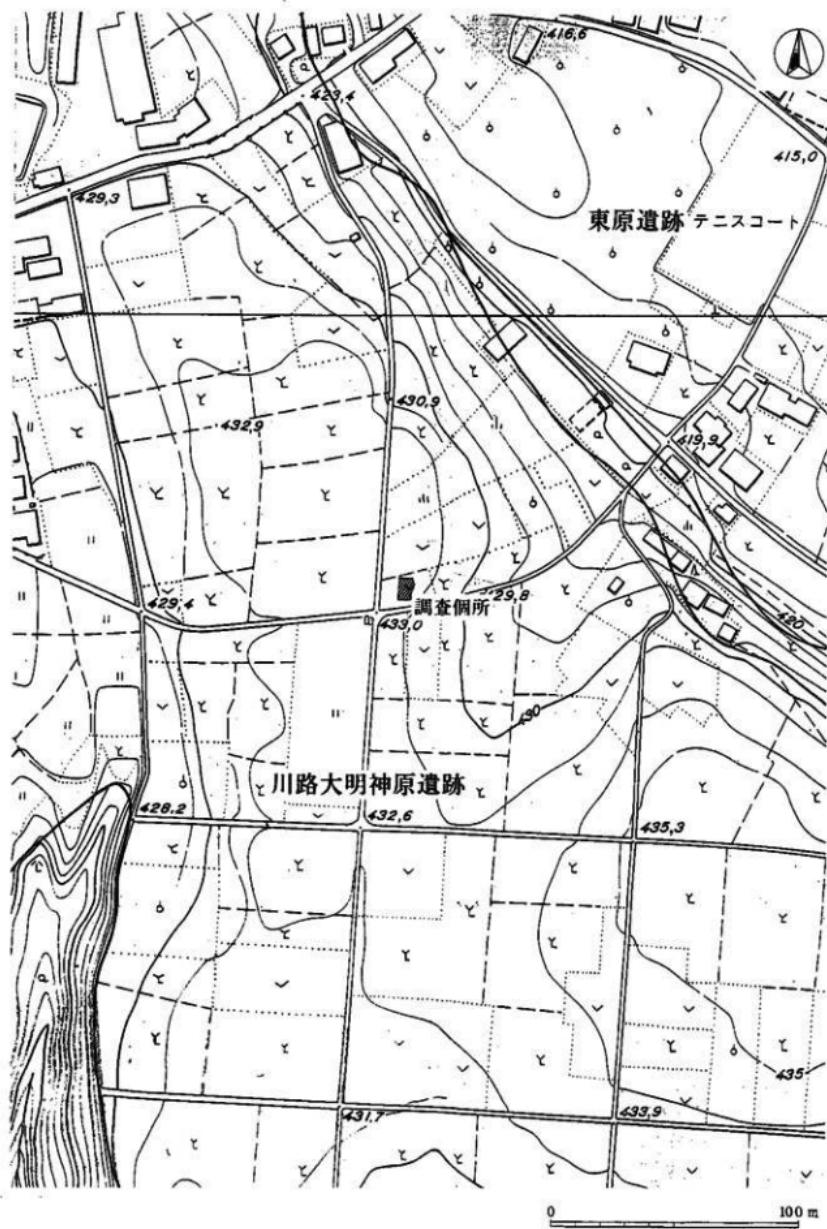
川路大明神原遺跡の所在する飯田市川路地区は、飯田市の南部にあたり、市街地からは南へおよそ8kmに位置し、東側を天竜川、北側を久米川、南側を弟川によって挟まれた面積およそ6.16平方キロメートルの地域である。西と南は標高450～550mの低い丘陵に囲まれ、天竜峡の渓谷に阻まれて形成された天竜川の氾濫堆積による平坦面が大半を占めている。かつては県道上川路大畠線から天竜川にかけて緩やかに傾斜をしており、広大な桑園地帯をなしていた。しかし、現在は昭和36年の水害をはじめ幾たびか水害を受け、その地形を留めていない。

川路地区の地形は、天竜川の浸食及び活断層に起因する段丘により3段に大別される。さらに、その段丘は北から相沢川・留々女川・南沢川・ねぎや沢川・観音沢川・大畠沢川・初沢川といった天竜川支流の小河川により細かく分断されている。一方、天竜川氾濫原から僅かに高まった下段とされるところは、北から久保田・留々女・殿村・富岡・梶垣外・井戸下が立地する。中段は現在国道151号が通過している標高400m前後の狭い段丘面である。北から花御所・今洞・御射山原・防垣外・道上が立地し月の木・大畠へと続く。丘陵地ともいえる上段は中段面より30m前後の比高差をもって北から琴原・藤治ヶ峯・上平・弥宣屋平・初ノ免・川路大明神原・中原が立地する。

遺跡は天竜川右岸に位置し、調査個所周辺の標高はおよそ430mで、北側を大畠沢川に、南側を初沢川によって開析された台地上に立地する。台地は中央には南から抉入する小河川の痕跡が認められ、これによって台地が東西に分断されており、それぞれ南北に細長い小丘陵を呈している。今次調査地点は、前述の東側の小丘陵縁辺部に位置し、調査地点から東側は緩やかな斜面となり、周辺は畠地・果樹園等に利用されている（挿図4）。

### 第2節 遺跡の基本層序

調査区北西端で基本層序の確認を行った。I層は耕作土で層厚はおよそ20cm、II層はローム漸移層で層厚はおよそ10cm、III層はソフトローム層で層厚はおよそ40cmを測りこの上面が遺構検出面となる。IV層はハードローム層で、更に下層の天竜川堆積物に続くと推定される。



挿図4 調査個所及び周辺遺跡

### 第3節 歴史環境

川路地区的地形は、天竜川に面する最低位段丘面と、桐林面に相当する標高400m以上の低位段丘面に大別される。特に最低位段丘面には前方後円墳の正清寺古墳をはじめ多数の古墳があり、市内でも有数の古墳集中地帯となっている。また、隣接する上川路地区には白鳳期の瓦が出土した開善寺・重要文化財の四仏四獸鏡が出土した御猿堂古墳など古墳時代から奈良時代にかけての主要な遺跡が集中する地帯である。こうした遺跡を中心に時代毎の概観を行い、川路地区的歴史的変遷を追ってみたい。(挿図3)

#### (1) 繩文時代

川路地区に人々が生活した痕跡を残したのは繩文時代に始まる。今次調査区南側の月の木遺跡からは、繩文時代前期前半の住居址が確認され、周辺に当該期の大集落が存在する可能性がある。また、久米川南岸の今洞遺跡からは繩文時代前期後半の住居址が確認されている。両遺跡とも、調査面積・遺跡の状態から集落の規模などは確認されていない。

繩文時代中期では低位段丘面上が中心になる。今次調査個所のある川路大名神原遺跡は川路地区的南端に位置し、周辺の調査状況から中期初頭から後葉にかけての30軒を越す集落が確認されており、拠点的な大規模集落が形成されていたと考えられる。同一段丘面の初ノ免遺跡・藤原塚遺跡でも繩文時代中期の遺物が表面採集されている。

繩文時代後期・晚期では生活の舞台としての川路は不明瞭となり、遺跡数も少なく、断片的な資料のみである。今洞遺跡からは浮縫網状文の施された水I式土器が出土しているが、当該期の遺構等は確認されていない。全国的に繩文時代後・晚期は水場に近い低地に進出し、河川を積極的に利用していることから、不明瞭な最低位段丘面に同時期の遺跡が存在する可能性が高い。

#### (2) 弥生時代

段丘上の東原遺跡で住居址が1軒確認されていたが集落の存在も不明瞭であった。しかし、今次調査区からおよそ1km北側の井戸下遺跡から、弥生時代中期の今阿島式期の住居址・弥生時代後期の住居址が確認され、周辺の最低位段丘面上に弥生時代中期から後期の集落が多数存在する可能性を示している。

#### (3) 古墳時代

古墳時代にはいると地区内に多くの古墳が築造される。正清寺古墳(前方後円墳)をはじめ地区内には48基の古墳が確認されている。古墳は花御所地籍・正清寺古墳周辺・月の木地籍に集中しており、古墳群を形成している。その立地は正清寺古墳周辺の古墳を除き、低位段丘面上に位置している。古墳の多くは破壊され、地区内に多くの出土品が伝えられている。川路最大の古墳である正清寺古墳は、全長約60mの前方後円墳で、後円部に横穴式石室を持つと伝えられ、五鈴鏡・玉類・馬具・武具類が出土している。平成11年度の治水対策事業に伴う発掘調査では、二重周溝を有し、周溝部分が一度修復されていることが判明している。周溝内からは多数の埴輪・須恵器・土師器類が出土し、5世紀末~6世紀と推定されている。また、花御所1号古墳からは金銅装の馬具類・玉類等の豊富な出土品が知られている。また下辻古墳は全長8.8mの横穴式石室を有し、馬具類・玉類等の出土品がある。今次調査区北西側の最低位段丘面にあった殿村1号古墳からは四獸鏡・素文鏡が出土している。

一方、古墳時代の集落は、治水対策事業に伴う発掘調査で、井戸下遺跡・留々女遺跡・辻前遺跡・久保田遺跡で大規模な集落が確認されている。このうち井戸下遺跡（飯田市教育委員会 2001）では古墳時代中期を中心とする30軒の住居址が確認されており、天竜川を挟んで東側に位置する細新遺跡（飯田市教育委員会 1998）と集落の消長が同様の傾向を示していることが指摘されている。今後、他遺跡の報告が行われる中で、天竜川両岸における古墳時代の様相が判明すると思われる。

#### （4）奈良・平安時代

奈良・平安時代の川路地区は断片的な資料のみであったが、竜丘上川路には奈良時代と推定される布目瓦が出土した開善寺境内遺跡があり、周辺に寺院の存在を窺わせる。川路地区では、治水対策事業で調査された留々女・辻前遺跡から平安時代の住居址が確認されている。井戸下遺跡では奈良時代～平安時代と推定される水田址・溝址が確認され、低位段丘面一帯に集落と水田が営まれていたと推定される。

#### （5）中世

川路地区が文献上に現れるのは貞和2年（1346年）の三浦和田文書中の7月19日室町幕府下知状案である。これは当時、伊賀良庄地頭であった江間氏の族人江間尼淨元が庄内の中村・河路の2郷を開禅寺（開善寺）に寄進し、それを新給人が了承した旨の記載がある。また、織田氏の信濃攻略により開善寺から持ち出された梵鐘（現高遠町桂泉院に存在）には文和4年（1355年）の銘があり、その文中に伊賀良庄上河路郷の記載がある。こうした史料から室町時代には川路地区が上河路郷・下河路郷にわかれ、伊賀良庄に含まれていたと考えられる。また、康永3年（1344年）小笠原貞宗譲状の中に伊賀良庄が記載されており、室町時代には小笠原氏が川路地区を領有していたことがわかる。その後、武田氏の伊那侵攻後、天正7年（1579）の上諏訪造営帳に伊賀良庄内の役錢納入状況が記されており、その中に上河路郷・下河路郷等の記載が見られる。このように川路地区は伊賀良庄の一郷として文献に記されている。河路郷の詳細は不明であるが、井戸下遺跡からは14世紀代から15世紀代にかけての屋敷跡が確認されており、留々女遺跡でも同時期の掘立柱建物址群が検出されている。こうした成果から河路郷の集落の実態が判明すると思われる。集落の他に今次調査地点北西側の城山には、尾根を利用した山城が確認されている。伝承等も無く、詳細は不明な点が多いが、戦国期の山城と推定されている。

## 第Ⅲ章 調査結果

### 第1節 遺構

#### (1) 繩文時代の遺構（遺構図-挿図5 遺物図-挿図7 写真図版2～6）

##### ①土坑01

調査区北側CF41を中心に確認された縄文時代と推定される土坑である。長径61cm・短径50cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で深さは7cmを測る。遺構の埋土は単層で、炭化物の混入が見られた。遺物は出土していない。

##### ②土坑02

調査区北東端のCF42を中心に確認された縄文時代と推定される土坑である。長径67cm・短径40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で深さは11cmを測る。遺構の埋土は褐色土の単層で、炭化物の混入が僅かに見られた。遺物は出土していない。

##### ③土坑03

調査区北側CE41～CF41にかけて確認された縄文時代の土坑である。南側で土坑05と重複し、これより新しい。長径110cm・短径65cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で深さは17cmを測る。遺構の埋土は黒色土の単層で、直径5mm程度の炭化物の混入が見られた。遺物は縄文時代中期の土器片が出土している。

##### ④土坑04

調査区中央やや北寄りのCE41を中心確認された縄文時代と推定される土坑である。長径40cm・短径30cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で深さは13cmを測る。遺構の埋土は褐色土の単層で、遺物は出土していない。

##### ⑤土坑05

調査区西側CE41～CE42を中心に確認された縄文時代の土坑である。長径180cm・短径135cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で深さは17cmを測る。遺構の埋土は黒色土の単層で、炭化物の混入が多く見られた。遺物は縄文時代中期後半の土器片が出土している。

##### ⑥土坑06

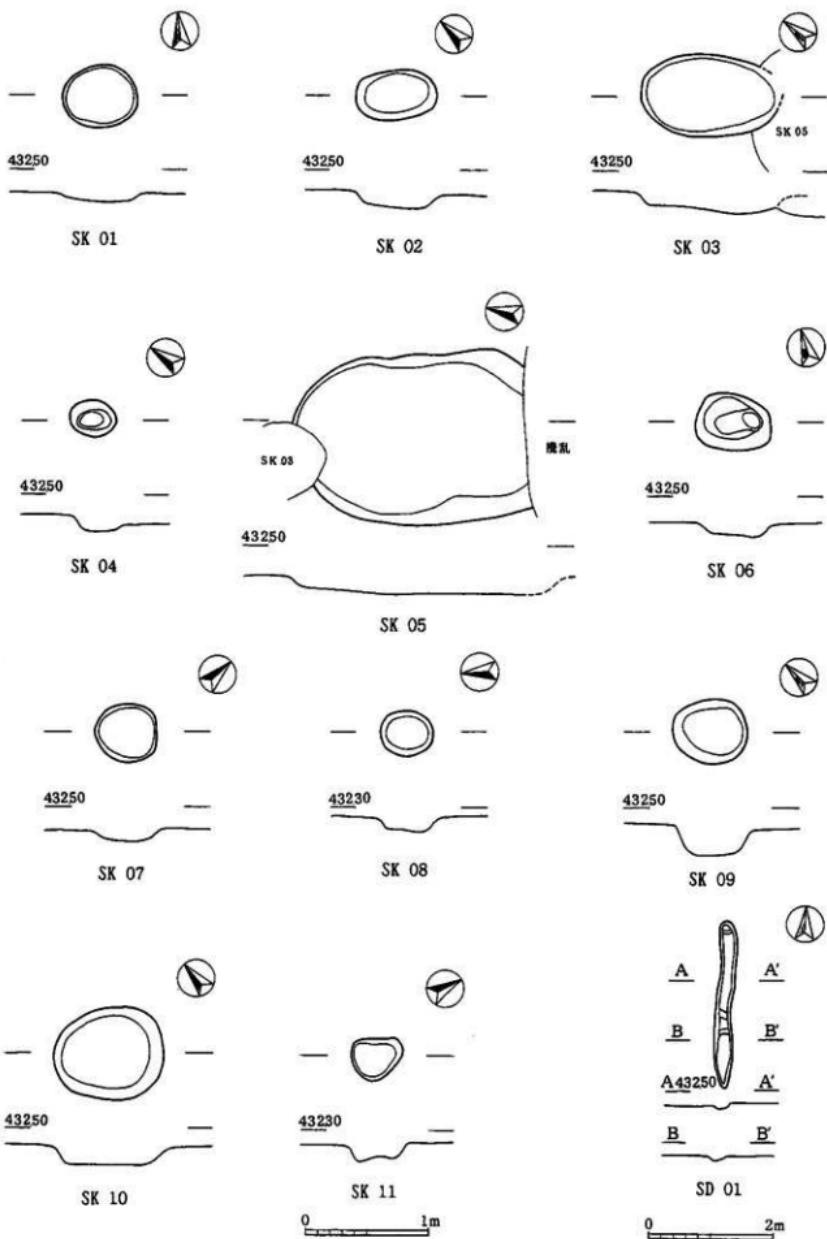
調査区中央やや西よりのCE41を中心確認された縄文時代の土坑である。長径61cm・短径44cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で深さは12cmを測る。遺構の埋土は黒色土の単層で、縄文時代中期後半の土器片が出土している。

##### ⑦土坑07

調査区中央やや西寄りCD40を中心確認された縄文時代と推定される土坑である。直径50cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。断面形は逆台形で深さは10cmを測る。遺構の埋土は褐色土の単層で、炭化物の混入が見られた。遺物は出土していない。

##### ⑧土坑08

調査区南側CC41を中心確認された縄文時代の土坑である。長径44cm・短径37cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で深さは11cmを測る。遺構の埋土は褐色土の単層で、炭化物の混入が見られた。遺物は縄文時代中期の土器片が出土している。



挿図5 土坑・溝址

#### ⑨土坑09

調査区北側CE41を中心確認された縄文時代と推定される土坑である。長径60cm・短径49cmを測り、平面形は橢円形を呈する。断面形は逆台形で深さは24cmを測る。遺構の埋土は褐色土の単層で、遺物は出土していない。

#### ⑩土坑10

調査区北側CE41～CF41にかけて確認された縄文時代の土坑である。長径88cm・短径74cmを測り、平面形は橢円形を呈する。断面形は逆台形で深さは16cmを測る。遺構の埋土は褐色土の単層で、炭化物の混入が見られた。遺物は縄文時代中期後半の土器片が出土している。

#### ⑪土坑11

調査区南端CB41を中心に確認された縄文時代と推定される土坑である。長径40cm・短径34cmを測り、平面形は不整形を呈する。断面形は凹状を呈し、深さは11cmを測る。遺構の埋土は褐色土の単層で、炭化物の混入が見られた。遺物は出土していない。

#### ⑫溝01

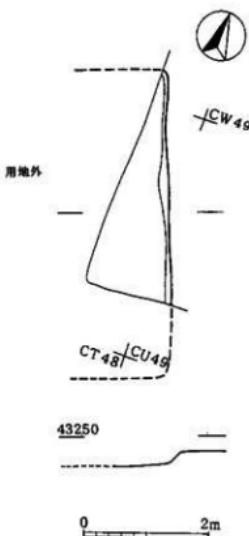
調査区ほぼ中央CE41～CC41にかけて検出された。長さ2.7m、最大幅27cmを測る。溝の断面は逆台形で、底面に水流の痕跡等は確認されない。埋土は黒色土の単層で、黒曜石の細片や縄文時代中期と推定される土器小片が出土している。形状から住居址の周溝の可能性もある。

### (2) 弥生時代の遺構

#### ①住居址01 (遺構図-挿図6 遺物図-挿図7 写真図版2・6)

調査区南西端で住居址の一部が確認された。遺構の大半は調査区外へ延びる。遺構覆土上面は耕作による擾乱を受けており、住居址に関連すると推定される礫が擾乱土に含まれていた。遺構覆土は黒色土で、縄文時代の土坑とは異なる。床面は平坦で、部分的に硬く締められている。

一部のみ検出されたため全体のプラン等詳細は不明であるが、弥生時代後期と推定される土器片が出土しており、壁の立ち上がりや床面の状況から弥生時代後期の住居址と判断される。



挿図6 住居址01

## 第2節 遺物

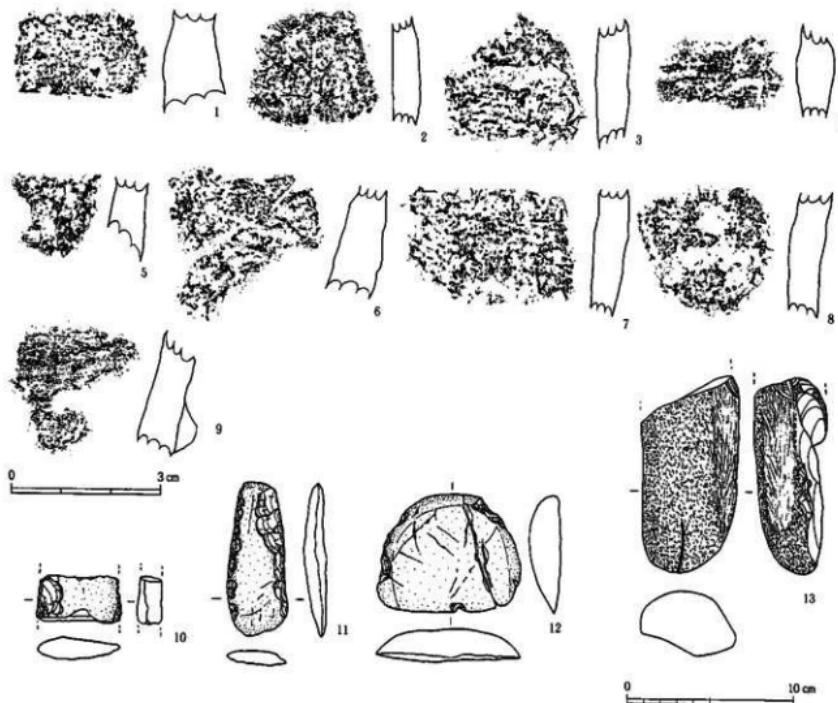
### (1) 土器 (挿図7 写真図版6上段)

今次調査区から出土した土器はいずれも細片であり、全体の形状等を示す遺物は確認されていない。1～5は、いずれも土坑から出土した土器片である。このうち3は横位の沈線が施されているものの、他は明瞭な文様等は確認されない。しかしながら土器の胎土及び混和材の状況から縄文時代中期後葉の土器群と考えられる。また、7は、他の縄文土器に比し、器壁が薄く焼成等も異なり弥生時代後期の土器片に類似する。外面にはミガキが見られるが、内面は荒れており器種は不明である。

### (2) 石器 (挿図7 写真図版6下段)

遺構からは黒曜石の細片のみ出土しており、図示するものはない。掲載した石器はすべて耕作土中から出土している。13は緑色岩製の磨製石斧未製品である。前面に調整痕がみられ、調整中に欠損したと推定される。長さ11.9cm、幅5.8cm、厚さ3.9cmで重さは414gを測る。11は硬砂岩製の打製石器である。長さ9.2cm、幅3.6cm、厚さ41gを測る。12は硬砂岩製の横刃形石器である。刃部の長さは8.6cm、厚さ1.9cm、重さ136gを測る。10は硬砂岩製の打製石斧の洞部と推定される。

これらの石器は、その特徴から、いずれも縄文時代中期後半と推定される。



挿図7 出土遺物 (1:SK03 2:SK05 3:SK06 4:SK08  
5:SK10 6-7:SB01 8-13:遺構外)

## 第IV章 総 括

今次調査は、携帯電話中継基地局鉄塔建設地という極狭い範囲に限られたもので、遺跡全体からするとそのごく一部に試掘孔をあけた程度のものといえる。その調査成果は本文中に記したとおりであり、周辺の調査事例とあわせ、川路大明神原遺跡の遺跡景観が判明しつつあると言える。こうした成果に注目し、調査成果について総括する。

### 第1節 遺跡の景観

川路大明神原遺跡は、その名の示すとおり、広大な平地全体が遺跡範囲として捉えられている。しかし、詳細に微地形を観察すると、細長い微高地や谷状の地形が隨所に確認され、調査によって遺跡とその周辺の景観を復元することのできる場所と言える。遺跡の調査事例としては今次調査地点南側に隣接して三遠南信道及び休憩施設建設に先立つ調査や、個人住宅建設及び宅地造成に先立つ調査が実施されており、主に縄文時代中期を主体とする遺跡であることが判明している。こうした調査成果から縄文時代中期における遺跡の景観は、台地ほぼ中央の南から抉入する小河川により分断された細長い小丘陵の西側端部に集落が直線的に展開し、天龍側に面した東側端部には落とし穴等が配置された狩場が推定される。更に今次調査で確認された土坑は、集落の墓域を示している可能性がある。また集落の水場としては今次調査区西側の小河川が推定され、全体の構成として、西側から水場→微高地の集落→斜面部にかけての墓域→狩場→天竜川といった景観が広がっていたと推定される。

一方、弥生時代後期の住居址は、三遠南信道路建設に先立つ調査でも確認されており、東側の一段低い段丘面に所在する東原遺跡でも住居址が確認されている。このため階段状に連なる段丘全体に弥生時代後期の住居址が散在する景観を想定できる。こうした集落展開は、高松原遺跡（飯田市教委 2000）、はりつけ原遺跡（飯田市教委 1998）と同様な傾向で、段丘上の弥生時代後期集落に特徴的といえる。

### 第2節 結語

今次調査の結果は以上のとおりで、周辺の調査と合わせ、川路大明神原遺跡の遺跡景観が復元できたことは大きな成果といえる。しかしながら、三遠南信道路の開通や、県道バイパスの整備によって、周辺の開発が急激に進むことが予想される。このため、今まで以上の文化財保護の本旨に沿った、たゆまない努力こそが肝要となる。

なお、発掘調査及び整理作業にあたり、地元川路地区の皆様や調査に携わった方々、そして埋蔵文化財保護に深い御理解を賜り、惜しみない御協力をいただいた株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモネットワーク本部の関係者の皆様にあつく御礼申し上げます。





調査区遠景



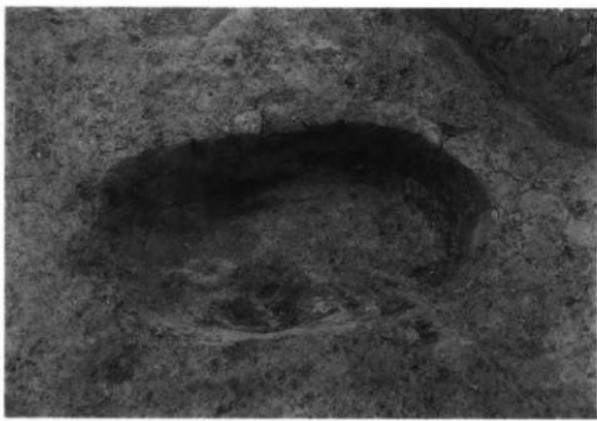
調査区全景



住居址01



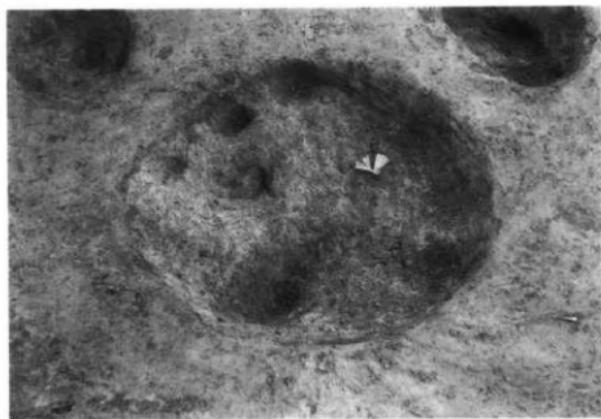
土坑01



土坑02



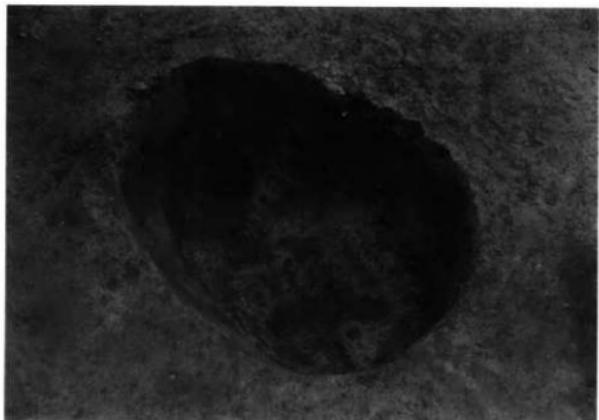
土坑03



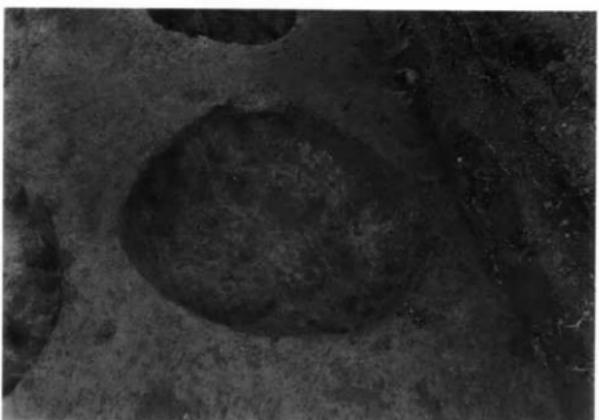
土坑07



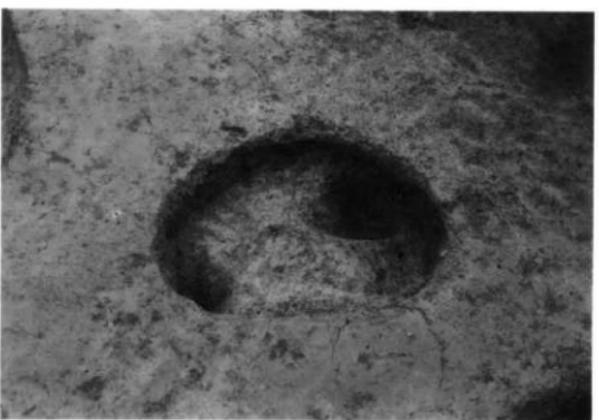
土坑08



土坑09



土坑10



土坑11



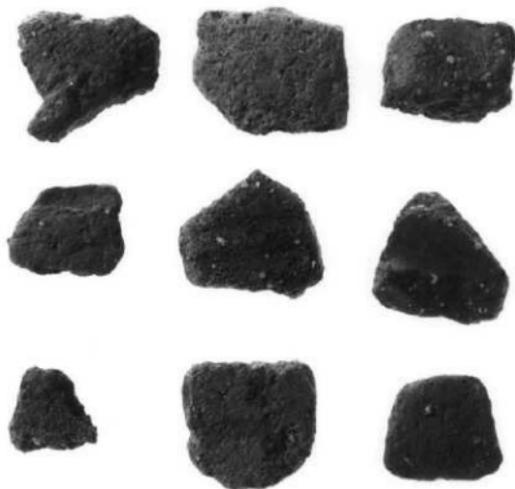
溝址01



委託測量



調査風景



出土土器



出土石器

# 報告書抄録

| ふりがな  | かわじだいみょうじんばらいせき                          |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
|---|--|--------------------|-------------------|--------------------|------------------------------|-----------------------------|--------------------|--|--|
| 書名  | 川路大明神原遺跡                                 |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| 副書名   |  |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| 巻次  |  |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| シリーズ名   |  |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| 編著者名  | 下平 博行                                    |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| 編集機関  | 長野県飯田市教育委員会                              |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| 所在地   | 〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 ☎0265-22-4511 |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| 発行年月日   | 西暦2008年3月31日                             |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| ふりがな<br>所収遺跡名   | ふりがな<br>所在地                              | コード<br>市町村<br>遺跡番号 | 北緯                | 東経                 | 調査期間                         | 調査面積                        | 調査原因               |  |  |
| かわじだいみょう<br>川路大明神<br>じんばらいせき<br>原遺跡   | いいだしかわじ<br>飯田市川路                         | 20205              | 35°<br>26'<br>07' | 137°<br>48'<br>58' | 平成18年5月15日<br>↓<br>平成18年6月1日 | 44m <sup>2</sup>            | 携帯電話中継<br>基地局鉄塔の建設 |  |  |
| 所収遺跡名   | 種別                                       | 主な時代               | 主な遺構              |                    | 主な遺物                         | 特記事項                        |                    |  |  |
| かわじだいみょう<br>川路大明神<br>じんばらいせき<br>原遺跡   | 集落                                       | 縄文中期<br>弥生後期       | 土坑11基<br>住居址1軒    |                    | 縄文土器・石器<br>弥生土器              | 縄文時代中期後半集落の縁<br>辺部の状況が判明した。 |                    |  |  |
| 報告書要約   |  |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |
| 縄文時代中期後半の土坑群の検出により、川路大明神原遺跡での集落の縁辺部の状況が明らかとなった。<br>また弥生時代後期住居址の検出により、市内他所における段丘上の当該期集落展開と同様な傾向にあること<br>が判明した。 |  |                    |                   |                    |                              |                             |                    |  |  |

---

## 川路大明神原遺跡

2008年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地  
長野県飯田市教育委員会  
印 刷 飯田共同印刷㈱

---

